SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

トルコ語における態の選択

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, 裕司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008911

トルコ語における態の選択

川　口　裕　司

Ⅰ．いまなぜ「態」なのか？

ある言語研究者が何らかの理論的枠組みの中で、ある特定言語の基本的な統辞構造を明らかにし、そこにあらわれる単位の機能を考察しようとするとき、程度の差こそあれ、一般に、二つの全く相反する方向づけが研究者の間に観察される。たとえば基本的な統辞構造と思われる「主辞」「述辞」「目的辞」を考えてみればよい。ある分析者にとってこれらは自明の統辞単位である。彼はこの三つの単位により基本的な統辞構造が構築されることをもちろん認める。しかし彼は自分の文法知識ないしは直観に照らしてこれらを理解し、それ以上それらの単位の間の統辞関係を分析の対象としない。そして別のもっと複雑な統辞機能とは何なのかを問う。ところが別の分析者にとっては、これら三つの統辞単位の機能をまずもって明らかにしないことには、いかなる統辞構造も分析することはできない相談なのである。

とはいえ現状では、基本的な統辞構造についてすら研究者の間に見解の一致が見られるわけではない。それゆえ上記の相反する方向づけは、いわば統辞論者が言語研究に取りかかるときの姿勢の違いにすぎない。しかしそうは言うものの、統辞論者がいったん「態」を分析しようと思ったが最後、もはやそうした姿勢の違いを等閑に付すわけにはいかなくなる。基本的な統辞構造とそこに現れる統辞単位の機能、「態」はまさにこれらを考える上で格好の材料を提供してくれる。だからこそ「態」を分析することで、おのずと統辞論者は次のことに気づかされる筈である。それはみずからが依って立つところの理論的背景が基本的統辞構造とその統辞関係について何を教え、何を考えさせてくれるのかということだ。

本論文ではトルコ共和国で話され、そして書かれているトルコ語を例にとり、

「主辞」「述辞」「目的辞」からなる基本的な統辞構造とその三つの単位の統辞的機能を「態」との関係において考えることにする(1)。

「態」の研究はトルコ語学の中の他のテーマにくらべ先行研究に恵まれている。本論文でも必要に応じて出典を明らかにしながら先達の例文を引用することにした。また独自の資料体として以下の作品に現れる文や発話を分析した。

資料体（[　]内は本文中での省略形）

ALTAN, Çetin (1981) Al işte İstanbul の以下の随筆 Surlar boyunca, Yenikapı'nın Pazar gezmesi, Merkez Efendi, Zeyrek, Bir taverna, Sonunda biz biteceğiz [Istanbul]

FAİK, Sait (1981) Bütün Eserleri 1, Semaver/Sarnıç の以下の随筆 Meserret Oteli, Bir köyün dört hikayesi, Babamın ikinci evi, İpekli mendili, Kıskançlık, Bohça, Şehri unutan adam, Üçüncü mevki, Louvre'dan çaldığı heykel, Robenson, Bir vapur [Faik]

KEMAL, Yaşar (1983) İnce Memed II の pp. 50-117 [Memed]

OFLAZOĞLU, A. Turan (1982) Kösem Sultan の第1幕第1場から第7場, pp. 13-95 [Kösem]

SEMİH Mehmet (1982) Türk Mizah Hikâyeleri Antolojisi の以下の小話 İmrenilecek bir ölüm, Göbek, Sırça Köşk, Hava dolmuşu, Abbas yolcu, Kavga, İnsanlar Uyanıyor, İmza elçisi, Açlık psikolojisi, İyi bir kısmet için, Mirasın hakkını vereceksin, Uzmanlar [Mizah]

II. 行為項分析

「態」が言語的選択要素であることは川口(1993 b, 31-34)ですでに触れたので同じことをここで繰り返すつもりはないが、トルコ語の具体的な分析を始める前に、若干の言語事実とその解釈を確認しておきたい。

まず、「態を選択する」というからには、「態を選択しない」発話がある筈であり、これを能動態（＝態ゼロ）と呼ぶ。「態アリ」と「態ゼロ」の関係はこうして欠如的対立(opposition privative)であると考えられる。この解釈が意味するところは、一つの発話の中に受動態と能動態が共起することは決してないということである。ところが多くの言語理論は、西欧伝統文法の影響であろうか？、

「態（voix, diathèse)」の名のもとに様々な現象をひとまとめにしてしまっている。

たとえば、Lucien Tesnière は Eléments de syntaxe structurale（1976）の中で6つの「態」について触れ、能動態(diathèse active)、受動態(d. passive)、再帰態(d. réfléchie)、相互態(d. réciproque)、使役態(d. causative)、行為項消去態(d. récessive)の解説を行なった。こうした分類は、彼が主張するところの「行為項(actants)」の観点から発話を眺める場合にのみ納得できる。ここで問題になる「行為項」とは、基本的統辞構造に現れる二つの要素、俗にいう「主語」と「目的語」（使役態の場合、さらに第三の「行為項」も関係しうる）が述部とどのような論理的関係を持っているのかを示すための用語であり、そうした基本的な行為項の組み替えという視点から出発して彼が六つの態を認定したことは評価されるべきであろう。しかし発話の論理的関係を分析しているにすぎない行為項分析が、すなわち統辞関係の分析に等しいわけではない。

言語現実を観察する限りにおいて、筆者には Tesnière が認定した六つの「態」がそれぞれ同じ言語学的地位をもつようには思えない。もしも仮に同等の言語単位であるとすれば、特定の意味ないしは文脈の制約がなく、他の条件が全て同じであれば、その六つの「態」はそれぞれ同等の両立可能性あるいは結合可能性をもっていておかしくはない。しかるに現実は全くそのようにはなっていない。能動態かつ使役態、能動態かつ再帰態、受動態かつ使役態、受動態かつ再帰態、などが後述するように若干の制約はあるものの現に存在しているのに、能動態かつ受動態の発話はあり得ないのである(2)。すなわち能動態と受動態は両立不可能であり、両者が同一の述辞の中に同時にあらわれることはない。

能動態と受動態は欠如的対立をなし、他の態との関係とは異なっている。川口(1993 b, 31-33)でも触れたが能動態と受動態では発話の論理的関係が組み替えられない。これに対して能動態と再帰態、能動態と使役態、等では論理的関係そのものが組み替えられている。このことをまずトルコ語の簡単な例を用いて説明しよう。

今、「Aという人物がBという人物を見た」という経験があったとしよう(3)。この経験の中には二つの行為項が現れている。能動的なAと受動的なBである。いくつかの言語理論は「態ゼロ」の発話から「態アリ」の発話が生み出されると解釈するが、この考えは大いに批判を受ける必要がある。「態ゼロ」の発話がア・プリオリに存在する根拠は何なのか？このような前提に対して後で反論を述べたいと思う。受動態が能動態から生成されるという見解では、言語現象に

おける量的価値（発話における能動態の頻度と形態の単純性）が質的価値（統辞構造の派生関係における基本性）に転化されてしまっている。この種の誤解は言語研究においてしばしば見られる。たとえば形態論における基本形の認定作業を思い出してみるとよい。形態的に頻度が高く単純であるからという理由で、それが派生関係における基本形になるとは限らない。

先にも述べたように「態ゼロ」と「態アリ」は欠如的対立をなしている。そもそもどちらが派生関係において基本的なのかという疑問は、「統辞構造の派生関係における基本性」という意味をまずもって定義するべきだったのだ。たとえば音韻論における子音pとbは欠如的対立をなしていると言われる。声の有無により両者は区別されるからである。この「声」をその対立の「標識」と考えるなら、pが「無標」でbは「有標」の項である。しかしだからと言って、pのほうがbよりも音韻構造の派生関係においてより基本的であると言えるのだろうか？ (4)

話を元に戻すが、「Aという人物がBという人物を見た」という経験を、能動の行為者Aの視点に立って言語的現実として切り取る、これにより「見た」という述部(gördü) が選択され、この述部を中心にして発話 A B'yi gördü.「AはBを見た」(-yiは限定の直接目的)が生み出される。Bの項は「見た」という行為を受容する行為項、受動項である。いまこの受動項Bの視点に立ち、経験を言語的現実に切り取る、換言すれば「態を選択する」と、こんどは「見られた」という述部 (görüldü) が選択され発話 B görüldü, 「Bは見られた」(発話内の -ül- が受身を表す)が生み出される。このときBは能動態のときと同じように発話の論理的関係としては受動の行為項である。すなわち態が選択されても発話の論理的関係はなにも変わっていない。

つぎに「Aという人物がBという人物の体を洗った」という経験を想定しよう。態を選択しない場合、A B'yi yıkadı. という発話が生まれる。今、A＝Bの関係を仮定すると、「Aは自分の体を洗った」ことになり A yıkandı. (-n-が再帰を表す) となる。この発話ではAは能動的行為項であると同時に受動的行為項でもある (Gencan 1979, 338)。つまり再帰が起きているわけだ。この再帰の発話においては、態ゼロの行為項の論理的関係（Aは能動、Bは受動）が組み替えられてしまい、Aは能動かつ受動の行為項になっている。ただしトルコ語では再帰をもっとはっきりと表現するために再帰代名詞を使った態ゼロの発話を用いることもある。A kendi kendini yıkadı.「Aは自分自身の体を洗った」(発話中の kendi kendiniが再帰代名詞、-ni は限定の直接目的辞を表す)

(Lewis 1983, 150)。

最後に「Aという人物がその仕事をした」という経験を想定しよう。態ゼロは A şu işi yaptı. となる、これを使役の発話「Aという人物がBという人物にその仕事をさせた」は、A şu işi B'ye yaptırdı. (発話内の-tır- が使役を表す) となる。態ゼロでは「(その仕事を) した」のはAであり、Aが能動的行為項であったが、使役の発話では「(その仕事を) した」のはBであってAではない。またしても発話内の論理的関係が組み替えられてしまった。

発話に現れる要素の論理的関係が能動態と受動態の発話において組み替えられていないということは、同一の経験を異なる視点から言語的現実として切り取ったがためであろう。ここでは経験の中に現れる行為項と述辞の間の関係が発話の論理的関係を決めると考えているわけだが、これを組み替えることにより再帰と使役の発話が生まれているということを忘れてはならない。能動態と受動態の間では発話の論理的関係が組み替わっていないという点が再帰と使役とは全く異なっているのである。したがって、発話の論理的関係をいちど組み替えた後でも態を選択する可能性はまだ残されている。上記の再帰と使役の発話を受動態にするとそれぞれ、A yıkanıldı. (-n-が再帰で-ıl-が受身) Şu iş B'ye yaptırıldı.(-tır-が使役で-ıl-が受身)となる。しかしながらこれらの発話にはいくらか制約があるようである。再帰受身の発話は一般に人称が三人称単数に限られ(Ülken 1981 a, 76)、90 %以上が母音で終る語幹をもつ動詞だけに見られる(Lees 1973, 508)。使役受身の発話は意味が能動態のときと変わらないことがあるため、稀にしか現れないという(Lees 1973, 508)。

III. 主辞・目的辞・述辞

ところで「態」を選択しても発話の論理的関係は「態ゼロ」のときと変わることがないが、当然のことながら統辞関係には組み替えが起きる。この組み替えを関係文法(Relational Grammar)にならって、能動態の目的辞が主辞に昇格し (2 to 1 Advancement)、最初の主辞が chômeur になる (the initial 1 to become a 1-chômeur) (Kornfilt 1991, 88) と説明したのでは、何のために「態ゼロ」と「態アリ」の欠如的対立の意義を上で長々と説明したのか分からなくなる。能動態の一部とそれに対応する受動態だけを解釈できれば事足れりとするのであれば、このような説明でも納得できようが、言語事実を注意深く観察してみれば、すぐに問題はそんなに単純ではないことが分かる。

この関係文法の解釈に対して、すぐに指摘できる疑問は、能動態ではなぜ主辞と目的辞がなければならないのか、である。上の説明にはその前提として、能動態の述辞は主辞と目的辞をとる動詞であるという暗黙の了解がある。そのような動詞は一般に他動詞と呼ばれている。トルコ語では自動詞の語幹に使役の接辞が付加されると自動詞は他動詞化される。このことは多くの文法書が指摘するとおりである。Sebüktekin (1971, 82) はこの使役の接辞を「他動化辞(transitivizers)」と呼んでいる。たとえば自動詞の語幹 bat-「沈む」、dur-「止まる」、kork-「怖がる」に使役の接辞 (-tır-, -dur-, -t-) がつくとそれぞれ他動詞 batır-「沈める」、durdur-「止める」、korkut-「怖がらせる」となる。使役の接辞により他動詞化されるとき、語幹が変化し、これによって他動詞が自動詞から独立した一つの記号素になることもある。たとえば gel-「来る」、gör-「見る」、kalk-「起きる」に対応する他動詞が getir-、göster-、kaldır- になるといった具合である(Gencan 1979, 334)。

議論を簡単にするため、しばらくは他動詞と他動詞化された自動詞に話を限定しよう。これらの述辞は一般に、二つの参加項(participants)(5)をともなって現れる。一つは主辞であり、もう一つは限定の直接目的辞である。

まずは使役の接辞がついていない単純な他動詞、たとえば açmak「開ける(-mak は不定形の接辞)」という述辞を例にとって説明しよう。

1) Beni içeriye almamak için neden bu kadar direndiniz? Nihayet ben kapıyı *açtım*, sizler de yere yuvarlandınız, demiş. [Istanbul, 34] (主辞は ben、限定の直接目的辞は kapıyı)
「「こんなにまでしてどうして私を中に入れたくないのですか？とうとう私はドアを開けた、あなた方も床にころんだのですね」と(彼は)言ったそうだ」。(6)

2) Koca Osman onardığı eski kapıyı da götürdü açılan yere taktı, kilitledi *açtı*, kilitledi *açtı*, tamamdı. [Memed, 60] 「(Memedは) Osman伯父が修理した古いドアも持ってきて、開いた場所にそれをはめ、鍵をかけては開け、かけては開けし、完了した。」

1) の文では他動詞 açmak は限定の直接目的辞をともなっている。ところが 2) の文で、他動詞 kilitlemek「鍵をかける」と açmak「開ける」はいずれも限定の直接目的辞なしで使用されている。さらに観察を進めると以下の例文

もみつかる。

3）Ben isteksiz kendisine yer *açtım*. O, mağrur oturdu. [Faik, 66]
「私はしぶしぶ彼自身に席を開けた。彼は威張って座った。」
4）Karısına *açtı*. [Mizah, 92]（-a は方向をあらわす接尾辞）
「（彼は）妻に打ち明けた。」

3）では述辞が非限定の目的辞と凝結(figement)(Martinet 1985, 39)を起こし、yer açmak 「席をゆずる」という単一の複合動詞を形成していることがわかる(7)。最後に4）では、同じ述辞が方向をあらわす目的辞 karısına「自分の妻に」のみをともない、もはや他動詞であることをやめているかのようである。使役語尾によって他動詞化された述辞でも同じことが言える。

5）Çok *korkuttuk* ağlamadı. [Faik, 42]
「わたしたちは(小僧のコソ泥を)ひどく脅したが、彼は泣かなかった。」
6）《Ben eski bir avcıyım Bey. O atı neredeyse bulur, bir iki gün içinde vururum. Ya da sana yakalar *getiririm*.》
《Bana getirme vur.》 dedi Bey. [Memed. 53]
「「旦那、わしゃ老練の猟師じゃ。どこにいたってその馬を見つけて、一日かそこらで（そいつを）仕留めまさ。それか捕まえてお前んとこに持ってきてやろ。」「俺には持ってこないで殺せ。」と（Ali Safa）氏は言った。」

5）と6）のいずれの例でも他動詞 korkutmak 「脅す」、getirmek 「持ってくる」は限定の直接目的辞をともなっていない（他にも vurmak 「仕留める」とyakalamak 「捕まえる」を指摘することができよう)。このようにトルコ語では他動詞と自動詞を分け隔てている垣根がきわめて低いことがわかる。

L. Tesnière は二つの価(valeurs)をもつ述辞がその一方の価を不問に付して使用される、たとえば一般に主辞と目的辞をともなうとされる他動詞があたかも自動詞のように目的辞なしに用いられる現象をやはり「態」の現象と考え、「行為項消去態(diathèse récessive)」と命名した(Tesnière 1976, 277)。第II節で述べたように、Tesnière は行為項の組み替えの観点から「態」を分析する。そのためこのような「行為項消去」をも「態」として認定するわけである。こ

の言語現象を「態」として認定することに筆者は異論を唱えるが、「行為項消去」という現象そのものを統辞論において捉えようとした功績は十分に評価されるべきである。トルコ語はまさしく「行為項消去的」(récessive) な言語であると言えよう。

もし以上のことが理解されるとすれば、「態ゼロ」から「態アリ」が派生されることを理論の前提にはできないことがわかる。トルコ語の場合には、他動詞が常に主辞と目的辞をともなっているとは限らないからである。目的辞は「行為項消去」されているかもしれない。

この「行為項消去」の現象が、さらに重要な言語事実を明らかにしてくれることを指摘し忘れてはなるまい。そのことを説明するには上の例文において目的辞ではなく、主辞がどういう現れ方をしているのかを観察する必要がある。

1）と3）の例文で一人称単数の主辞 ben が現れるのに対し、2）と4）では人称代名詞はなく、述辞の活用語尾によって三人称単数の主辞が明示される。トルコ語では文脈の力により主辞が何であるのか明らかなとき、人称代名詞は用いられない（5）と6）の例を参照)。これも多くの文法家たちが指摘するところだ (8)。上でみたように目的辞は容易に消去されうるのに、主辞はなぜこのように抵抗を示すのか。理由は明らかである。比喩を用いて説明することはあまり好ましくないかもしれないが、この場合にはあえて比喩を用いたいと思う。

主辞と目的辞は独自の軌道を持ちながら惑星の周囲を回っている衛星のようなものである。このとき惑星とはもちろん述辞のことである。主辞と目的辞は常に述辞からの強い引力の影響下にあり、両者の統辞的ふるまいは述辞により制御されることになるが、述辞から受ける引力は明らかに主辞のほうが目的辞よりも大きい。述辞と主辞の間、あるいは述辞と目的辞の間の統辞関係とはこうした力関係に例えることができる。主辞と目的辞がうまくそれぞれの統辞機能を発揮できているのは、述辞からの引力が働いているおかげである。したがって、述辞を統辞的結合の「核」を構成する単位と考えることはまったく正当なことである（渡瀬 1992, 13-14)。

主辞は述辞の「第一参加項」、目的辞は「第二参加項」である。上でふれた「行為項消去」の現象はこの言語事実を見事に説明してくれる。他動詞において「行為項消去」が起きるとき、まず最初に消えるのは目的辞であって主辞ではない。

Ⅳ. 主辞機能

主辞は述辞の「第一参加項」である。これは述辞と主辞の統辞関係を示したにすぎない。それゆえ主辞は述辞により第一に引き出される参加項となるが、主辞そのものの働き、すなわち「主辞機能」とはいったい何なのだろうか (9)。

他動詞の発話で「態」を選択すると主辞にたつのは能動態のときの目的辞である。では能動態のときの主辞はどうなるのか。トルコ語の受動態を扱った論文では tarafından ＋行為項によって受動態における本当の行為項が明示されると述べているものが多い。しかし実際の発話を分析してみると、こうした例は稀であることがわかる。資料体の中では五例しかみつからない。少し長い引用になるが、議論に関係することなので全ての例をあげることにする。

7) V yüzyılda Teodos II'nin kız kardeşi *tarafından* Bizans'daki ilk hıristiyan topluluğunun doğmasını sağlıyan Aziz André'nin anısı için *yapılmıştı.*

[Istanbul, 35] (語幹 yap- に受身 -ıl- ; 行為項 kız kardeşi tarafından)

「(聖アンデレ教会は)五世紀にテオドシウス二世の姉妹によって、ビザンチウムでの最初のキリスト教徒の共同体作りに尽力したアジズ・アンデレを記念して作られたという。」

8) Kilise 2. Beyazıt zamanında padişahın emriyle Sadrazam K.M. Paşa *tarafından* camie *çevrildi.* [Istanbul, 35] (語幹 çevr- に受身 -il- ; 行為項 K.M. Paşa tarafından)

「教会はバヤジット二世の時代に、同王の命令により宰相 K.M. パシャによってモスクに変えられた。」

9) Fatih Camii vaktiyle Saints-Aportres Kilisesinin kalıntıları üstüne Fatih *tarafından* sonradan Müslüman olan Kristodulom adındaki bir Rum mimara *yaptırtılmıştı,* 1942'den 1970'e kadar sürmüştü yapımı. [Istanbul, 43] (語幹 yap- に二重使役 -tırt- と受身 -ıl- ; 行為項 Fatih tarafından)

「ファーティフ・モスクはその昔に聖使徒教会の遺構の上に征服王によって(建築されたが)、のちにイスラム教徒のクリストドゥロムという名のギリシャ人建築家に (再び) 建てかえさせたという、その工事は

1942年から 1970年までかかったという。」

7）—9）には共通性がある。いずれも歴史的事実を報告している。歴史的事実「AはBを〜した」という文脈で、受動項Bの視点からこの事実を伝えている。tarafından の現れるこうした文体的条件については Ülken が既に述べている。彼女によれば、「科学論文や印刷物ないし放送による報道以外の日常会話では tarafından や -ce の語尾を用いることはない」(Ülken 1981b, 58) という。-ce による行為者表現は資料体の中に一つも現れなかった。

トルコ人の文法学者が指摘するように受動態の場合、行為項は問題にならず、表現されるのは稀である(Atabay 他 1983, 85; Gencan 1979, 337)。その稀な二つの例をあげよう。

10) Lokanta sahibi uğradığı zararın kimin *tarafından tazmin edileceğini* anlamak telaşında çırpınarak şöyle diyordu: [Mizah, 17]
(語幹 tazmin ed- に受身 -il-; 行為項 kimin tarafından)
「レストラン経営者は自分にふりかかった損害を誰に賠償してもらえばよいものか、不安になり顔をひきつらせながらこう言っていた：」

11) Sıdık, maksadının ötekiler *tarafından anlaşılmasını* pek istemiyordu: [Mizah, 130] (語幹 anlaş- に受身 -ıl-; 行為項ötekiler tarafından)
「Sıdık は自分の意図を他人によって知られてしまうことをあまり望んでいなかった。」

Mizah の資料には明らかに受動態をあらわすと思われる例が全部で48例あらわれるが、そのうち46例は tarafından をともなわない。このtarafından +行為項についてはさらに後述する。行為者は tarafından 以外の表現により表されることもある。dolayısıyla や etkisiyle を使って行為項を表すとする文法書もあるが(Gencan 1979, 337)、資料体にその例はない。

以上述べたことから、受動文のほとんどが行為項の表現をともなわないことは明らかである。他動詞の受身では態ゼロのときの目的辞（受動項）が主辞となり、態ゼロのときの主辞はすでにふれた Tesnière の表現を借りるならば「行為項消去」される。これを図式化しよう。態ゼロと態アリの関係を見てみよう。

<<他動詞の態ゼロ>>			<<他動詞の態アリ>>	
行為項 ＋	受動項 ＋	事態	受動項 ＋	事態
(主辞)	(目的辞)	(述辞)	(主辞)	(述辞)
A	B'yi	gördü	B	görüldü

行為項消去
(態ゼロの主辞)
(A tarafından)

したがって、態アリの主辞は自動詞の構文で主辞が受動項をなしている構文にきわめて近い論理構造をもつことがわかる。例を示そう。

12) O parasızlığa *dayanıyordu.* 「彼は貧乏に耐えていた」
13) Bu olay Hasan'ı *üzdü.* 「この事件はハサンを悲しませた」
14) Hasan bu olaya *üzüldü.* 「ハサンはこの事件に悲しんだ」
(Ülken 1981b, 65) (語幹 üz- に受身 -ül-)

12) の動詞 dayanmak 「耐える・よりかかる」は dayamak 「支える」の語幹 daya- に後に述べる再帰の接辞 -n- がついて自動詞化したと形態的には解釈できるが、論理的には「貧乏が彼を責め、彼はこれに耐えていた」と解釈できるであろう。したがって主辞 O「彼」は少なくとも事態に働きかけを行なう行為項ではなく、事態を受け止める立場にある受動的な参加項である。一方，他動詞の文 13) を苦しみを受けるハサンの視点にたち受動態で表現した 14) の論理的関係は 12) と同じであると言わねばならない。すなわち O と Hasan は述辞に対して受動項を形成し、方向をあらわす接尾辞 -(y)a のついている parasızlığa と bu olaya (10) は共に事態が実現する場面を示していると言えよう。これも図式化しておこう。

<<他動詞の態アリ>>			<<自動詞の態ゼロ>>		
受動項 ＋	場面項 ＋	事態	受動項 ＋	場面項 ＋	事態
(主辞)	(場面辞)	(述辞)	(主辞)	(場面辞)	(述辞)
Hasan	bu olaya	üzüldü	O	parasızlığa	dayanıyordu

すでに述べたように主辞を述辞との関係によって定義するならば、述辞の「第一参加項」となるが、主辞自体のもつ機能は二つの相反する機能から成り立っている。一つは述辞があらわす事態に論理的に「働きかけを行なう参加項」を提示する、すなわち行為項を提示する機能であり、もう一つは事態を「受け止める受動的な参加項」を提示する機能である。

V．受動態と再帰：相反する二つの主辞機能の相克

上にあげた 14）Hasan bu olaya üzüldü. が「態」の表現なのかと疑われる方もおられようが、そこでは意味内容による態の定義は問題にならない。態ゼロ文との対立によってこの発話が受動態だと認定したのである。次の例も同様に考えられる。

15）Ayşe, Hasan'ı *sıkıyor.* 「アイシェはハサンを苦しめる」
16）Hasan, Ayşe'ye *sıkılıyor.* 「ハサンはアイシェにうんざりする」
（Ülken ibid., 65）（語幹 sık- に受身 -ıl-）

「態アリ」の 16）は「態ゼロ」の 15）に対立する。ところが次の例はどうだろう。

17）Oradan bir kaplan hızıyle denize *atıldı.* [Faik, 32]
「（その猫は）そこからトラのように速く海に飛び込んだ」

atmak 「投げる」は受身の接辞 -ıl- をとりながら、実際に「投げられる」のは「その猫自身」である。つまり主辞＝目的辞の関係が成り立ち、再帰が起きている。筆者は中世フランス語において再帰表現（se ＋述辞）が受動態の意味になるのは、「事態に積極的に参加すること」をあらわす主辞機能が弱まったためであると述べた（川口 1994, 70-77）。ここでは逆のことが言えよう。

形態は受身でありながら意味的に再帰になるのは、「事態に働きかけること」をあらわす主辞機能が強まり、その結果として「事態を受け止めること」をあらわす主辞機能のほうが弱まったためである。14）と 16）において主辞のハサンは、「悲しませる」と「苦しめる」という事態に積極的に関与して、自分自身を悲しませ、また苦しめる対象にしてしまった。こうして意味的に再帰が生じ

たと思われる。また付け加えておくと、「態ゼロ」の文 13）と 15）の主辞 Bu olay と Ayşe は、受動文 14）と 16）の中では「事態に働きかける」主辞機能を失い、このためもはや行為者(物)ではなくなり、これを tarafından を用いて表現することができなくなっている。

18） * Hasan, bu olay tarafından üzüldü.
19） * Hasan, Ayşe tarafından sıkılıyor. （ * は容認不可能を示す）

このような現象をトルコ人の文法家たち(Ergin 1982, 206 ; Gencan 1979,340)は、「再帰が未発達の動詞では受動形を用いて再帰を意味する」と記述しているが、これは不正確な解釈である。

確かにトルコ語の受動態と再帰表現は、しばしば混同して使用されるように見える。しかし注意深く観察してみるとそこには機能的な違いを読み取ることができる。トルコ語では受動態と再帰が形態的に区別できないことがあり、これが両者の混同の根本的原因であることを指摘しておく。Lloyd Swift がその混同の生じる文脈をまとめている(Swift 1963, 108-109)。

動詞の語幹末音		再帰形	受動形 (11)
母音	曖昧さなし	saklan- (-n-) 「隠れる」	saklanıl- (-nıl-) 「隠される」
子音	曖昧さなし	sevin- (-in-) 「気に入る」	sevil- (-il-) 「好かれる」
		görün- (-ün-) 「現れる」	görül- (-ül-) 「見られる」
子音の-l-	曖昧	bulun- (-un-) 「いる」	bulun- (-un-) 「見つけられる」

Swift の分類は形態的な基準のみに関するものであるが、動詞の語幹末が母音のときにも曖昧性が生じることを指摘し忘れている。しかし真の混乱はむしろ文脈が多義であることから生じているように思える。たとえば主辞が物のときは受動文、Çamaşır yıkanıyor.「下着が洗われる」(語幹末母音の後では再帰・受身ともに-n-)、いっぽう主辞が人のときは再帰文、Turgut yıkanıyor.「トゥルグトは体を洗う」と解釈されるとする学者(Gencan 1979,339)がいるが、主辞

が人のときでも多義性は生じうる。Çocuk yıkandı. は「子供が体を洗った」のか、それとも「子供が洗われた」のか（Wendt 1972,156)。

Swift が上の表で語幹末母音のときに曖昧さがないとしたのは、一部の動詞についてである。確かに語幹が母音で終るいくつかの動詞は、上のような曖昧性を避けるために二重の受身形を用いる。これは多くの文法書が指摘するところである（Gencan 1979, 340; Özkaragöz 1986, 78; Wendt 1972, 156)。

能動		単純受身(-n-)		二重受身(-nil-又は-nıl-)	
bekle-	「期待する」	beklen-	「期待される」	beklenil-	「(同左)」
de-	「言う」	den-	「言われる」	denil-	「(同左)」
iste-	「欲しい」	isten-	「欲しがられる」	istenil-	「(同左)」
ye-	「食べる」	yen-	「食べられる」	yenil-	「(同左)」
yıka-	「洗う」	yıkan-	「洗われる」	yıkanıl-	「(同左)」

曖昧性の生じる文脈で規則的にこの二重受身が使用されるのなら、体系的な欠如はたしかに補なわれよう。しかし受身の形態が意味的に再帰になる例は他の文脈でも少なからず指摘できるのである。

語幹 al- に受身 -ın-

20) Mehmet (*alınır*, ayrılarak) : [Kösem, 60]
「メフメットは苛立ち、別れぎわに：」

21) Bendenize gelince, uzmanlar kuruluna neden *alındığımı* bilmiyorum. [Mizah, 263]
「俺なんかは、専門家委員会になぜ入れられたのか分からない」

語幹 boz- に受身 -ul-

22) Töre *bozuldu*, düzen bağı koptu. [Kösem, 38]
「道徳は破壊され、規律が乱れた」

23) Ferhat Hoca da *bozuldu*. [Memed, 98]
「フェルハト師も苛立った」

語幹 göm- に受身 -ül-

24) Bir ara at ayaklarının sesleri kesildi, kuruşunlar sıkılmadı, köy derin

bir sessizliğe *gömüldü.* [Memed, 78]

「しばらく馬の足音は止んだ、弾丸も発射されなかった、村は深い沈黙の中に埋めこまれた」

25) Peçesiyle yüzünü örtüp kollarının arasına *gömüldü.* [Istanbul, 19]

「黒いベールで顔を覆い、両腕の間に（顔を）埋めた」

20) 23) 25) の再帰は明らかであるが、24) は受身なのか再帰なのか分からない。擬人化の用法以外では一般に「村がみずから静まることはない」であろう。結局のところ、ここで決め手になるのは、村（köy)が「沈黙する」という事態に「積極的に参加しているのか」あるいは「沈黙状態を受けとる場」なのかを判断するより他ないのではなかろうか。前者であると解釈すれば再帰文、「村はみずから沈黙した」のであり、後者のように解釈すると受動文、「村は沈黙の中に（自然によって？）埋め込まれた」のである。多義性は主辞の事態への参加の程度から発していると思われる。そしてこの多義性は第IV節 p. 128 で述べた主辞の相反する二つの機能に由来する。「事態に働きかけを行なう参加項」を示す機能と「事態を受け止める受動的な参加項」を示す機能との間に葛藤が生じ、そこから再帰と受身の間の多義性が生まれてくる。

Ülken 1981b の例を使いながら主辞の事態への参加についてもう少し詳しく説明してみよう。受身形を使っていながら再帰的意味解釈が可能になるとき、能動態の主辞は「事態への積極的参加」の機能を失い、もはや行為項として tarafından を用いることができなくなると上で述べた（p. 128-129 参照)。

26) Ayşe tabağı *kırdı.* 「アイシェは皿を割った」

27) Tabak (Ayşe tarafından) *kırıldı.* 「皿はアイシェによって割られた」

28) Ayşe, Hasan'ı *kırdı.* 「アイシェはハサンを怒らせた」

29) Hasan, Ayşe'ye *kırıldı.* 「ハサンはアイシェに腹をたてた」

26) の主辞 Ayşe は 27) においても tarafından によって示され行為項として機能する。ところが 28) での主辞 Ayşe が 29) においては、述辞kır- が受身の接辞 -ıl- を取ってはいるものの、「ハサンがハサン自身で腹をたてる」という風に再帰が生じた結果、「腹をたてた」という事態を受け止めるのはハサンであり、アイシェはもはや行為項ではなくなる。これをトルコ語では方向を表す接尾辞 -(y)e で表す。つまり Ayşe'ye 「アイシェに」は 12) の例文、O

parasızlığa dayanıyordu. 「彼は貧乏に耐えていた」における parasızlığa「貧乏に」と同じ「事態が発生する場面」を構成していると考えられる。

Ülken も指摘するように、受動態において事態を受けとる要素を方向の接尾辞 -(y)e であらわす動詞には、上例の kırmak 「怒らせる」のような心的状態を表す動詞がたしかに多い。しかしこうした主張に対しては彼女自身があげた例文からでもたくさんの反証をあげることができる。

30) Mustafa, Hasan tarafından *aldatıldı.*
31) Mustafa, Hasan'a *aldandı.*
32) Hasan (Ayşe tarafından) *görüldü.*
33) Hasan, Ayşe'ye *göründü.*

30) 31) の例はともに「ムスタファはハサンにだまされた」という意味になるのだが、31) ではだまされたムスタファの過失が大きいようである(Ülken 1981b, 64)。「自ら知りつつだまされた」ようなもので、その意味は再帰に近い。32) 33) は「ハサンはアイシェに見られた」を意味するが、33) ではアイシェに見られることをハサンはすでに意識しているという(Ülken ibid., 66)。「自ら望んで見られた」のであろう。これらの例の aldanmak「だまされる」と görünmek「見られる」は心的状態をあらわす述辞ではない。

34) Mustafa Hasan'a (Hasan tarafından) *yutuldu.*
「ムスタファはハサンに勝たれた」
35) Hırsız polise (polis tarafından) *yakalandı.*
「泥棒は警察に捕まえられた」(語幹 yakala- に受身 -n-)

34) の yutmak「呑み込む」は俗語的に用いられ「勝負に勝つ」こと意味する。その受動態の「勝たれる」と 35) の「捕まえられる」はふつう行為項が必要とされる事態を述べるためであろうか、能ゼロ文での主辞「ハサン」と「警察」は -(y)e のみならず、tarafından により表現することも可能であるという (Ülken ibid., 63)。

ところで受動態を統辞論的に分析するとき、「態の選択により述辞のもっている格付与能力(case assigning capacity)が抑制される」と主張する研究者がいる。格付与能力が抑制されることにより、能動態の直接目的辞が受動態の主辞

へと移行するのだという(Kornfilt 1991, 91)。この議論もやはり、述辞はもともと主辞と目的辞をそなえた他動詞であるという前提から出発しているように思える。そうした他動詞の受動態の現象だけを説明するために生まれてきた仮説であり、それは受動態にともなって生じるもろもろの言語事実を全く無視した解釈であると言わねばならない。

36) O yılandan *korkuyor.* 「彼は蛇を怖がる」
37) Yılandan *korkulur.* 「蛇は怖がられる」(語幹 kork- に受身 -ul-)
38) Öğretmen derse onda *başladı.* 「その教師は授業を十時に始めた」
39) Derse onda *başlandı.* 「授業は十時に始められた」
(語幹 başla- に受身 -n-)

36)—39) の例を眺めてみると、受動態になっても述辞の格付与能力は抑制されるどころか、まったく手つかずのまま残ることがわかる。分離の接尾辞-den を支配する korkmak「怖がる」と方向の接尾辞 -(y)e を支配する başlamak「始める」は受動態になっても同様の接尾辞を必要とするのである(12)。

態はどうして継子いじめをするのだろう？主辞と直接目的辞の格付与に対しては、述辞を圧迫して確かにその格付与能力を抑制するくせに、なぜ他の目的辞では圧力をかけないのであろうか？上にあげた例は直接目的辞を支配しない動詞、つまり他動詞ではない動詞の受動態であって、いわゆる例外なのだと主張すればそれで事足りるのか？さらに過激な立場をとる研究者は、他動詞以外の受動態そのものを疑うという(Kornfilt 1991, 91)。理論的な整合性を追及するあまり、これでは言語事実そのものの解釈までもが歪められはしないだろうか？

VI. 自動詞の受身：主辞の行方

他動詞における目的辞は述辞の「第二参加項」であり、トルコ語では「行為項消去」される可能性があると述べた(第III節 p. 123 を参照)。したがって「態ゼロ (能動態)」から「態アリ (受動態)」が派生するという前提は成り立たない。

ところで他動詞の目的辞が「行為項消去」されると残るのは主辞と述辞であり、これは自動詞と同じ統辞機能を有する発話になる。

6）の例 Ya da sana yakalar getiririm.「それか捕まえてお前んとこに持ってきてやろ」、あるいは2）の例(. . .) kilitledi açtı (. . .)「(Memedは)(. . .)鍵をかけては開け(. . .)」を思い浮かべるとよい。ここで少し意地悪く考えて、「捕まえる(yakalamak)」「持ってくる(getirmek)」「鍵をかける(kilitlemek)」「開ける(açmak)」は、たとえ目的辞が消去されても意味的に「他動性？」を保持しており、潜在的な目的辞が予想される、などと主張しても議論は平行線をたどるばかりである。

述辞の意味に照らして、発話の中に現実には存在しない目的辞を文脈の力で補ったとしても、述辞と目的辞の間に統辞関係が存在していると証明したことにはならない。「潜在的な目的辞」という概念は、思うに述辞のもつであろう結合可能性と両立可能性の一覧表を議論するときだけに有効な考え方であろう(13)。それはいわば、述辞の統辞特性を網羅する作業である。発話において観察される統辞関係は、述辞のそうした結合可能性が実際に実現した一つの例であるはずである。その統辞関係の中で潜在性を議論するのは本末転倒ではないだろうか。

ところで目的辞の消去された他動詞が受身になると、受動項はもともとなかったのだから受動態の主辞は存在せず、意味的には非人称受身になるに違いない。このような事態をトルコ語では二重受身の形式を使って表現する（再帰との区別のために用いられる二重の受身とは異なる点に注意されたい、第V節 p. 130 参照)。出現頻度の低い発話であるためか資料体の中に例がなかった。

40) Bu şatoda *boğulunur.*「この城では息がつまらせられる（＝息がつまりそうになる)」(Özkaragöz 1986, 77)（語幹 boğ- に二つの受身 -ul- と -un-)

41) Harpte *vurulunur.*「戦争では打たれ死ぬこともある」(ibid., 77)（語幹 vur- に二つの受身 -ul- と -un-)

Kornfilt は 40) の例はこのままでは容認不可能であり、これは boğmak「窒息させる」という他動詞ではなく、boğulmak「窒息する」という再帰化した自動詞の受身と考えることで容認可能になると述べている(Kornfilt 1991, 89)。ところが 41) についてはコメントしていない。これは問題ないということであろうか？二重受身のメカニズムは次のように図式化できるであろう。

	主辞	目的辞	場面辞	述辞
態ゼロ	A	B'yi	harpte	vurur.
態1	B		harpte	vurulur.
態2			Harpte	vurulunur.

41）に対応する「能ゼロ」の文は、たとえば A B'yi harpte vurur. 「AがBを戦争で打ち殺す」となろう。これをBの視点にたって態を選択すると、B harpte (A tarafından) vurulur. 「Bは戦争で（Aによって）打ち殺される」になる。そこでさらにもういちど態を選択すると 41）の発話が生み出される。こうした一連の操作が可能な背景には二つの重要な言語事実があると考えられる。

すなわちトルコ語では他動詞も自動詞も「行為項消去」が可能であることがまず一つである。またもう一つは、他動詞の受動態の主辞と自動詞の能動態の主辞が論理的に共通していることである。第二の点により「態1」の主辞Bと自動詞の主辞が論理的に同一視される。つまり「態1」の文は受動項の主辞Bをもつ自動詞の文とみなされる。さらに第一の事実によって、自動詞とみなされた「態1」の主辞Bが行為項消去され、結果として非人称受身の「態2」の文に移行する。

非人称受身にあらわれる述辞では超越時制の接辞（40）と 41）の -ur-）だけが用いられる（Özkaragöz 1986, 77）。これは統辞的な制約ではなく、意味的な制約であろう。非人称の発話が特定の時に拘束されない普遍的事態に言及するため超越時制が用いられるのだろう。

発話の論理的関係からみて他動詞受動態の主辞と自動詞能動態の主辞に共通性がみられることはすでに何度かみた通りである（第IV節 p. 127 参照）。

12）O parasızlığa *dayanıyordu.* 「彼は貧乏に耐えていた」
35）Hırsız polise (polis tarafından) *yakalandı.*
「泥棒は警察に捕まえられた」

12）と 35）の主辞 O と Hırsız はいずれも受動項である。また「貧乏に(parasızlığa)」と「警察に(polise)」も事態が発生する場面をあらわす要素と解釈できる。ただし 35）では tarafından を用いて行為項を表現する可能性も残されている。したがって両者の論理構造は「受動項＋場面項＋事態」という構造をなしていると言える。

こうした発話の論理的構造の観点から自動詞を二つに下位分類しようとする研究者がいる。分類の基準として自動詞の主辞に着目する。一つは主辞が事態に対して「積極的に働きかける」、したがって事態は主辞の意志が反映され、主辞が能動的に振舞うことのできる状況をあらわすのでなければならない。もう一つは主辞が事態に対して「消極的に働きかける」、このとき事態は主辞の意図が反映されない、主辞を受容するような状況でなければならない。前者を「非能格自動詞(unergative intransitives)」と呼び、後者は「非対格自動詞(unaccusative intransitives)」と呼ばれる(Biktimir 1986, 56)。

この術語の是非についてここでは議論しないが、この考え方は自動詞の受身を考えるとき問題になると思われるため引用した。適切な術語ではないが、ここでは前者を「能動的主辞をもつ自動詞」、後者を「受動的主辞をもつ自動詞」と呼ぶことにしたい。態を選択できるのは前者の「能動的主辞をもつ自動詞」に限られると主張する学者が多い。

「能動的主辞をもつ自動詞」を受動態にすると行為項はもはや全くあらわれる余地がなくなる。つまりこの自動詞の受動態では tarafından ＋行為項が表現されることは決してない。このことを説明しよう。

42) Başı bereli, on üç, on dört yaşlarındaki genç irisi bir çocuk, içeri girmemizi engellemek istiyor: - *Girilmez* buraya, yasak diyordu. [Istanbul, 37] (語幹 gir- に受身 -il-)
「頭にベレーをかぶり 13・4 歳にしては大柄な子供が、わたしたちが中に入るのを邪魔しようとして:「ここへは入れないよ、禁止です」、と言っていた」

43) ‹‹- Şu tersliği görüyor musun, su kaynattı...››
‹‹- Kaynattığı kadar kaynatsın. Böyle gideriz. (...)››
‹‹- *Gidilmez* böyle. Dün bir, bugün iki.
[Mizah, 252-253] (語幹 gid- に受身 -il-)
「見ろ、また面倒なことが起きた、(ラジエーターの)水が沸騰した...」「オバーヒートするだけさせればいいさ。このままで我々は行くんだ。(...)」「このままじゃ行けない。昨日も故障が一つ、今日で二つ目だ。」

42) に対応する能動態の発話はおそらく Siz buraya giremezsiniz, yasaktır.「あなたがたはここへは入れません、禁止です」であろう。すなわち言語現実とし

て「態」が選択される以前の経験には、行為項「あなたがた」、場面項「ここ(へ)」、事態「入る（ことができない)」を想定することができる。「態ゼロ」の発話において、自動詞 girmek 「入る」は能動的な主辞 Siz を備えていた筈である。43) では行為項「われわれ」、場面項「このままで」、事態「行く」が想定され、能動態の発話は Biz böyle gidemeyiz.「われわれはこのままで行くことができない」であったと思われる。

しかるに受動態の発話では自動詞の能動的な主辞 Siz 「あなたがた」と Biz 「われわれ」が消えてしまっている。多くの研究者は、自動詞の受身はすなわち「非人称受身」であると断言して止まないが、筆者はこのような単純な解釈に賛同できない(14)。42) と 43) の例からも明らかなように、受動態の三人称単数形の述辞 Girilmez と Gidilmez には、事態に積極的に働きかけを行なう項、すなわち能動的な行為項 Siz と Biz を喚起する機能が未だに残っているように思えるからである。ちょうどこれは、主辞がなく動詞の語幹だけで発話が成り立っている命令文 (Gir!「入れ」と Git!「行け」) においても、同じような行為項（二人称単数 Sen 「おまえ」) が喚起されるのに似ている（上例の邦訳も参照) (15)。もう一つ別の例をあげよう。

44) 〈〈Bir yanlışlık olacak!〉〉 dedim. 〈〈Sen bilfiil öğretmenlik değil, bilfiil muhaliflik yaptın!〉〉 〈〈Daha iyi ya!〉〉
〈〈*Anlaşıldı,* otur iç bir kahve!〉〉 [Mizah, 86]
(語幹 anlaş- に受身 -ıl-)
「そりゃ少し違うよ！」と私は言った。「君は実際のところ教職じゃあなくて、実際には抵抗運動をやったんだ！」「そいつはさらにいい！」「(これで)お互いが理解されたね、まあ座ってコーヒーでも一杯飲めよ！」

44) も非人称の受身とは言えない。能動態の述辞 anlaş-「お互いに理解しあう」（語幹末の -ş- は相互的な行為を表す）は明らかに主辞 Biz 「われわれ」を喚起する。能動態は Biz anlaştık. 「われわれはお互いに理解しあった」となろう。

このように自動詞の受身は必ずしも非人称の受身とは言い切れない例があることを指摘しておく。したがって「態ゼロ」の主辞は Biktimir の定義したように不特定である必要はない。しかし主辞が人間でなければならないという彼女の見解は資料体を観察するかぎりでは正しいように思える(Biktimir 1986,

60)。非人称の受身と考えられる例を二つあげておこう。

45) Kentten kente değil, köyden köye *gidilmezmiş* ondan izin almayınca. [Kösem, 22] (語幹 gid- に受身 -il-)
「「町から町ではなく、村から村へは(誰も)行けなかったらしい、彼の許可がない限りは」
46) Bu alanda iyi *koşulur*.「このトラックでは(誰でも)よく走れる」(Kornfilt 1991, 88) (語幹 koş- に受身 -ul-)

さて、自動詞が受動的主辞をもつときはどうであろうか。Perlmutter はこの種の自動詞受身に否定的であったが、トルコ語学者は逆にその可能性を主張している。ただし Kornfilt も指摘するように、その種の受動文の容認可能性には著しいばらつきが見られ、また何をもって受動的主辞をもつ自動詞とするのか、その基準が意味論的な基準である点も災いして議論を難解なものにしている(Kornfilt ibid., 88-89)。ここでは可能派に組みし、若干の例をあげるに留めたい。

47) Buzun üstünde *kayılır*. (Kornfilt ibid., 89)
(語幹 kay- に受身 -ıl-)
「氷の上では(誰でも)滑って転ぶ」
48) Fakat değiştirişin sonundaki bu melâle, hüzne, ıstıraba *tahammül edilir* mi? [Faik, 118] (語幹 tahammül ed- に受身 -il-)
「しかし(いったい誰が)変転の結果であるこの悲哀、悲嘆、不安に耐えられようか」

ここでも超越時制(47)と48)の -ır-と -ir-)が非人称受身の中で用いられている(同節 p. 135 参照)。

Ⅶ. 終りに

冒頭でも述べたように「態」を定義し分析することは、すなわち基本的な統辞構造を定義し分析することに他ならない。それは統辞論の研究の中でおそらく最も基本的で、理論的な、また地味な作業であろう。その仕事にとりかかる

には、それぞれの統辞論者が基本的な統辞構造に関して自分なりに納得のできる理論的枠組みをあらかじめ備えて置くか、あるいは分析をしながらそれを構築してゆかねばならない。

本論考では後者の立場をとった。すなわち、機能主義の統辞論を土台とし、そこから出発しておきながら、トルコ語という言語現実をできる限り現実的に分析をすすめる中で、筆者なりの理論的枠組みをこしらえてゆこうとしたつもりである。その仕事は多くの点でいまだ未完成であり、ここではその大枠を提示できたにすぎない。したがって厳密な意味で本論に結論なるものはない。

まず最初に行為項分析と統辞分析の本質的な違いにふれ、「態」の問題を考えるとき、能動態と受動態は欠如的対立をなす二項と考えることを提案し、他の再帰や使役との本質的な相違を述べた。

つぎに基本的な統辞構造である主辞、述辞、目的辞について、その統辞関係を略述した。「態」との関連では、主辞機能が注目される。

主辞機能には相反する二つの機能があるように思われる。一つは「事態に積極的に参加する項」を示す機能であり、いま一つは事態に積極的には参加しない、「事態を受け止める受動的な参加項」を示す機能である。述辞のあらわす事態に主辞がいずれのかかわり方をするかで、主辞機能は二つに分裂する。トルコ語ではその相反する二つの機能の間にしばしば葛藤がみられ、その結果、再帰形と受身形の意味的混同が起きたり、再帰文なのか受身文なのか曖昧になることがある。

トルコ語では他動詞と自動詞を隔てる垣根は低く、他動詞はしばしば目的辞なしで用いられ自動詞と同じ統辞構造をもつ。トルコ語では他動詞と自動詞のいずれにおいても態が選択可能である。自動詞や目的辞が消去された他動詞を受動態にすると、主辞が復元不可能になることがあり、結果として発話は非人称受身の意味内容をもつ。

註

（1）筆者は現代フランス語と中世フランス語における「態」の選択について考察したことがある：川口（1993b)、川口（1994）を参照。またこの論文を執筆するにあたり本論と密接に関係すると思われる Laura KNECHTの博士論文 Subject and Object in Turkish. Ph. D. dissertation, 1986, MIT Press, Cambridge, MA. を利用できなかった点が悔やまれる。

（2）Lees（1973，511-512）は自らが認定したトルコ語の四つの態（受動態、再帰態、相互態、使役態）の結合可能性を一覧表にしている。彼の言語現実に対する認識とその解釈は我々のと異なっているが、参考のために掲げておく（L＝受動態、N＝再帰態、S＝相互態、T＝使役態）。

A．現在使用

$\left\{\begin{matrix}N\\S\\T\end{matrix}\right\}$ T　　$\left\{\begin{matrix}S\\T\end{matrix}\right\}$ T＋L　　［N＋L］

B．きわめて稀かおそらく不使用

$\left\{\begin{matrix}L\\T+T\end{matrix}\right\}$ T　　$\left\{\begin{matrix}S\\N+T\end{matrix}\right\}$ L　　$\left\{\begin{matrix}L\\N\\T\end{matrix}\right\}$ S

C．現在不使用

$\left\{\begin{matrix}S+T\\T+S\end{matrix}\right\}$ T　　T＋N

D．立証不可能

$\left\{\begin{matrix}S\\L\\N\end{matrix}\right\}$ N　　L＋L　　S＋S

全ての態の３つの組み合せ（例、L＋L＋L、N＋N＋N、等）

（3）言語的現実として切り取られる以前の経験をどのように記述すればよいのか、筆者は常に困難を覚えるが、ここでは記述の便もあり、AをBより前に述べ、「見る」という行為（＝事態）を最後に記述したが、このような位置関係は発話の論理的関係と何の関係もない。おそらくそうした順序づけが問題となるのは、経験が記号素として言語的現実に分節される（第一次分節）過程を通じてであろう。後述するように、述辞を言語的現実として選択することによって、述辞を中心とする記号素の相互関係（＝統辞関係）が初めて問題になる。

（4）R. ヤーコブソン（1976，48-94）にこうした音韻構造の派生過程における基本性（優先性）の研究がある。

（5）筆者は行為項分析と統辞分析とは本質的に異なるものであると考えている

ため、統辞分析においては、行為項(actants)を参加項 (participants)と呼ぶことにしたい。述辞あるいは述部は必ずしも行為をあらわすとは限らない。述辞・述部は事態 (行為をも含む) をあらわし、そこに関係する言語要素は参加項と呼んでおいたほうが適切かと思われる。

(6) 例文の邦訳において( )内の表現は原文にはなく、文脈により補われた。

(7) yer açmak のような複合動詞が、単一記号素をあらわすのか、それとも連辞(syntagme)なのかという区別は形態分析のみならず、統辞分析においても重要である。しかしながら本論と直接に関係がないため、ここでは詳しく説明しない。その区別の基準について別のところで考察したことがあるのでそちらを参照していただきたい (川口 (1993a, 65-72))。ここでは若干の言語事実を指摘するにとどめる。まず yer açmak という単一の記号素のなかには別の要素を挿入できない。たとえば複数をあらわす接尾辞 -ler を yer に付加できない * yerler açmak。また yer を目的辞と考えることも困難である。述辞 açmak が限定の直接目的辞をとるとき、yer は yeri となる筈であり、非限定の直接目的辞をとるときは、Üçüncü hafta fotoğrafçı bir stüdyo açtı. (Mizah, 266) (bir が不定の直接目的辞をあらわしている)「三週間目に写真家はあるスタジオを開いた」のようになる。

(8) この定式化は実のところ不正確である。三人称以外の人称は述辞にそれぞれ異なる活用語尾が付加されるため、これにより主辞の人称代名詞は容易に復元可能である。文脈の力に頼らなくてはならないのは三人称の主辞である。

(9) これから解説を行なう「主辞機能」は、述辞と主辞の統辞的関係とは異なり、主辞それ自体の働きであると言える。以下に述べる「主辞機能」の中に「主辞の意義特性(signifié)」を見てとる読者もおられようが、個別の記号素に特有の意義特性ではなく、統辞的要素としての主辞にあまねく観察されるであろう意義特性であるがゆえに、筆者はそれを発話の中で主辞が果たす役割、「主辞機能」と考えたい。

(10) 接尾辞 -(y)e は母音調和の規則により、ここでは変異体 -a になっている。

(11) 再帰形 -(i)n- と受動態 -(i)l- の括弧内の母音は、母音調和の規則により四つの変異体(-i-, -ı-, -u-, -ü-)を持つ。

(12) 次の引用を参照。"Verbs that require certain suffixes like the dative

-(Y)E or the ablative -DEN still require these in the passive :" (Rona 1989, 173)。36)—39) は Rona の例に基づいている。

(13) たとえば敦賀はフランス語の述辞 mettre の第2補語に関する結合可能性と両立可能性の一覧表(パラディグム)を記述した(Tsuruga 1984)。こうした記述的研究は統辞論研究を進めてゆく上での極めて重要な基礎研究を成しており、とりわけ他動詞の第2補語を消去することが可能なトルコ語の場合、同種の研究の登場が切に期待される。

(14) オスマン語文法の伝統を生かした pasif と meçhul の区別も同様である(Ergin 1982, 204-205)。pasif 動詞では身にふりかかる、あるいは曝されている事態に言及するために行為者(fail)が必要になるという。これに対して meçhul 動詞では示される事態が誰の手によってなされたのか明確ではない。Erginの説明はもう少しニュアンスに富んでいるが、最終的に述べられていることは pasif が他動詞受身、 meçhul が自動詞受身であるということに他ならない。

(15) 自動詞受身でしばしば用いられる超越時制の語尾(ここでは -mez は否定形)は可能性をあらわす(Sebüktekin 1971, 85)。したがって 42) と 43) の二つの発話は、事態の不可能性を Siz と Biz に伝達していると考えてよい。

参考文献

ADALI Oya (1979) *Türkiye Türkçesinde Biçimbirimler*, Türk Dil Kurumu Yayınları, Ankara.

ATABAY Neşe, ÖZEL Sevgi, Çam Ayfer (1981) *Türkiye türkçesinin Sözdizimi*, Türk Dil Kurumu Yayınları, Ankara.

ATABAY Neşe, KUTLUK İbrahim, Özel Sevgi (1983) *Sözcük türleri*, Türk Dil Kurumu Yayınları, Ankara.

BANGUOĞLU Tahsin (1974) *Türkçenin grameri*, Baha Matbaası, İstanbul.

BİKTİMİR Tuvana (1986), "Impersonal passives and the -ArAk construction in Turkish," in *Studies in Turkish Linguistics*, Eds. Dan Issac Slobin and Karl Zimmer, Amsterdam/Philadelphia, 53-75.

DENY Jean (1921) *Grammaire de la langue turque* (*dialecte osmanli*), Editions

Ernest Leroux, Paris.

ERGİN Muharrem (1982) *Türk Dil Bilgisi*, 7 Baskı, Boğaziçi Yayınları, İstanbul.

GENCAN Tahir Necat (1979) *Dilbilgisi*, 4 Baskı, Ankara Üniversitesi Basımevi, Ankara.

KORNFILT Jaklin (1991) "Some current issues in Turkish syntax," in *Turkish Linguistics Today*, Eds. Hendrik Boeschoten and Ludo Verhoeven, E. J. Brill, Leiden, 60-92.

LEES Robert B. (1973) "Turkish Voice," in *Issues in Linguistics, Papers in Honor of Henry and Renée Kahane*, University of Illinois Press, 504-514.

LEWIS G. L. (1983) *Turkish Grammar*, The Clarendon Press, Oxford.

MARTINET André (1985) *Syntaxe générale*, Armand Colin, Paris.

ÖZKARAGÖZ İnci (1986) "Monoclausal double passive in Turkish," in *Studies in Turkish Linguistics*, Eds. Dan Issac Slobin and Karl Zimmer, Amsterdam/ Philadelphia, 77-91.

PERLMUTTER D. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis " in *Berkeley Linguistics Society* 4, 157-189.

RONA Bengisu (1989) *Turkish in three months*, Hugo's Language Books Ltd, Hertford.

SEBÜKTEKİN Hikmet (1971) *Turkish-English Contrastive Analysis*, Mouton, The Hague.

TESNIERE Lucien (1976) *Eléments de syntaxe structurale*, 2ème éd. 3ème tirage, Editions Klincksieck, Paris.

TSURUGA Yoichiro (1984) "Le paradigme du second complément du verbe *mettre*," *Studies in Humanities 65*, Faculty of Humanities, Niigata University, 27-60.

ÜLKEN Fatma (1981a) "Türkçe eylemlerde çatı - Bir örnekleme girişimi," *Bağlam 3*, İstanbul Üniversitesi Yabancı Diller Yüksek Okulu Almanca Bölümü Dergisi, İstanbul, 71-81.

——— (1981b) " Türkçede edilgen çatı özneleri üstüne bir araştırma," *Dilbilim 6*, İstanbul Üniversitesi Yabancı Diller Yüksek Okulu Fransızca Bölümü Dergisi, İstanbul, 55-70.

UNDERHILL Robert (1976) *Turkish Grammar*, MIT Press, Cambridge.

——— (1986) "Bibliography of Modern Linguistic Work on Turkish," in *Studies*

in Turkish Linguistics, Eds. Dan Issac Slobin and Karl Zimmer, Amsterdam/Philadelphia, 23-52.

WENDT Heinz F. (1972) *Langenscheidts praktisches Lehrbuch Türkisch*, Langenscheidt KG, Berlin/München.

川口裕司 (1993a)「言語記号としての複合名詞」,人文論集 43-2, 静岡大学人文学部, 65-86.

――― (1993b)「「態」の選択としてみたフランス語の代名動詞」, ふらんぽ ― 20, 東京外国語大学フランス語研究室, 31-45.

――― (1994)「古フランス語の態に関する若干の考察(代名動詞の用法を中心に)」, 人文論集 44-2, 静岡大学人文学部, 53-83.

R. ヤーコブソン (1976)『失語症と言語学』, 岩波書店.

渡瀬嘉朗 (1991)「「態」の選択」, 語研資料 12, 言語研究 I, 東京外国語大学語学研究所, 1-36.

――― (1992)『ことばと現実(言語学概論)』, 東京外国語大学フランス語研究室.